

学会 報告

日本臨床皮膚科医会北海道支部 第47回研修講演会

日本臨床皮膚科医会北海道支部学術担当
札幌市医師会（小泉皮膚科クリニック）

小 泉 洋 子

去る2008年11月8日ルネッサンスサッポロホテルにおいて、日本臨床皮膚科医会北海道支部第47回研修講演会が開催されました。旭川医科大学皮膚科学講座教授 飯塚一先生が座長をされ、医療法人社団美久会網走皮膚科クリニック院長 川嶋利瑞先生が「ニキビ治療の現状とアダパレンへの期待」と題してご講演されました。引き続き、北海道大学大学院医学研究科皮膚科教授 清水宏先生が座長をされ、東京女子医科大学皮膚科准教授 林伸和先生が「ニキビ治療最前線：アダパレン登場の意義と使い方」と題してご講演されました。また11月12日の「皮膚の日」にちなみ、皮膚の日市民公開講座と個別相談が同じ8日の午後札幌市医師会館で開催されました。札幌医科大学皮膚科講座教授 山下利春先生の司会で、旭川医科大学皮膚科講座講師 高橋英俊先生がご講演されました。テーマは「たかがニキビ・されどニキビ！皮膚科専門医によるニキビ治療」でした。

ニキビについての講演がたたみかけるように続いたのは、国際的なニキビ、ざ瘡の治療薬である外用レチノイドがこれまで本邦では未承認であったところに、外用レチノイド、アダパレンが承認されたことによるものでしょう。アダパレンの承認により、本邦におけるざ瘡治療ガイドラインが完成し、国際的ガイドラインにある標準的治療ができるようになります。

川嶋先生のご講演では、ざ瘡の初発年齢は14.9歳、医療機関を受診する年齢は17.7歳とタイムラグがあり、症状は3分の2が中等症であるといえます。ざ瘡は炎症を伴わない面皰から丘疹膿疱になっていきます。丘疹の周囲には微小面皰が多数あります。これまでざ瘡の治療は外用療法として抗菌剤・硫黄含有製剤・レチノイド製剤（ルチン、個人輸入）、内服薬は抗菌剤・ビタミン剤・漢方製剤・ホルモン剤、その他の治療法として面皰圧出・ケミカルピーリング・

レーザー治療などが行われてきました。問題点として、面皰治療剤が欠けていました。網走皮膚科クリニックではざ瘡患者の現在の治療に対する満足度アンケート調査を行っています。1カ月間に受診した92人において、抗菌剤外用療法の満足度は50%、内服70%でした。外用療法の満足度は低いがその中で、ルチンの満足度は高く、アダパレン外用治療によるざ瘡の治療の進歩が期待されました。飯塚先生から「ケミカルピーリングからアダパレンに変えると考えているでしょうか」と質問がありました。ピーリング治療は行っています。アダパレンに変えていくように考えているが、ピーリングの効果が良いため継続する例もあるといえます。

林先生はアダパレンの意義は、求められていた面皰治療にあるといえます。ざ瘡の発症機序は毛包漏斗部の閉そくと皮脂の分泌亢進により微小面皰ができることによります。面皰治療法となるケミカルピーリング、外用レチノイド、経口避妊薬、抗アンドロゲン薬（アルダクトン）はいずれも未承認でありました。尋常性ざ瘡治療ガイドラインは、エビデンスに基づく治療の推進、経験の乏しい医師がざ瘡治療を行う現状がありざ瘡治療における混乱の予兆を感じ、本邦で欧米のガイドラインをそのまま踏襲できない状況（治療法の違い、症状の重症度の違い）などから求められていました。ガイドラインでは、重症度分類、治療法の推奨度決定基準（A-D）を決め、クリニカルクエスチョンを作っています。エビデンスレベルの高い治療法を導入しました。アダパレンは軽症から重症ほぼすべてのステージの治療に組み込まれています。アダパレンの使い方について本邦での第Ⅲ相試験結果をみながら説明されました。面皰に対しては1週目から有意差を示し、1月目には皮疹は半分に減っています。炎症性丘疹は6週目には有意差を持って減少しています。患者満足度は60%でした。1年間の第Ⅲ相長期安全試験では3カ月以降も皮疹数は減っています。84%に皮膚乾燥、皮膚不快感、紅斑などの副作用があったが、このために脱落した例はなかったといえます。副作用が問題となるのは導入から2週間の間で、副作用の90%近くがこの期間に現れます。顔全体に1日1回0.6g程度単純塗布し、炎症部に外用抗菌薬を併用します。刺激症状に対しては、保湿剤を先に外用する、抗菌剤を中止する、アダパレン使用回数を減らします。刺激症状が落ち着いたら再開していきます。妊娠中、妊娠の可能性のある者には禁忌です。ニキビ治療の展望は日本のざ瘡治療が世界基準に近づいたことによりニキビ治療の対象患者が増え、満足度の向上、QOLの向上が期待できると述べています。また随伴症状の軽減を図ることも重要でしょう。

講演後、アダパレンを顔面以外に使ってはいけない理由について質問があり、「試験されていないので効果評価ができていない」「使用量の安全性の問題が解決されていない」と回答されました。外来にいっぱいやってくるニキビの患者さんに、よりよい治療ができますよう努力していこうと思いました。